

# 昭和三十三年研究発表会

## 研究発表要旨

### 沈亜之と小説

内山 知也

中唐の元和・長慶・太和のころは、小説を作る文人が輩出した時代である。その中の一人沈亜之は韓愈の門下で、李賀・杜牧・李商隠に影響を与えたと言われる。

沈下賢集には、数篇の小説が掲載されて残っているが、それらの作品が、彼の散文作品の中で占める位置、及び他の作者による小説との位置を考え、この時代の小説の傾向をあとずける一つの手がかりとした。

- (1) 沈亜之の伝記について
- (2) 小説製作の時と背景について
- (3) 小説の傾向について
- (4) 他の小説との関係
- (5) 文学史的意義について

### 鄭人精神の一考察

緒形 暢夫

「俗」について、漢書地理志には、「凡民……好悪取舎動靜亡常、随君上之情欲、故謂之俗」とある。この地理志の見解を中心にして、「俗」「精神」「思想」の関連、及び「俗」形成要因「精神」「種子」について考える。ついで、右の結果に基づいて、鄭人精

神及び鄭人精神と先秦諸子思想(特に申不害の思想)との関連について考察する。なお、併せて、先秦諸子思想の起源問題の一端に触れたい。

### 詩人としての曹丕の評価

鈴木 修次

曹丕(一八七—二六)の詩は、曹植(一九二—二三二)のそれとくらべて、人間への興味に於て燃えるものが乏しい。ときによると、人間を見る目が以外に乾燥しており、且つわりきれてしまっている。しかし、だからといって、従来考えられて来たように、詩人としての曹丕を低く評価することは危険である。詩人としての曹丕の関心は、実はスタイルの問題に有ったように私は思う。それまでは、軽俗な文学形式であったものを、貴族文学の位置に、更には芸術としての文学の位置に高める為の橋渡しをなしたのが、曹丕であったであろう。詩人としての曹丕は、そこに於て燃焼したのであろう。

### 魏晉玄学の実相

加賀 栄一

魏晉の学問は玄学の一色で塗られてしまふほど、その大勢は玄学化のそれであった。ところが、その玄学の実体は何かについて、十分に明確な説明がなされているとは、まだ必ずしも言えない現状にある。たとえば、老莊を学び老莊によって立言するものは、すべて玄学と言えるのであろうか。また「玄学清談」と連称されることが多いが、清談は即ち玄学なのであろうか。道教と玄学とは実質内

容の上からどんな関係にあるのか。また、同様に仏教と玄学はどんな関係にあるのか。等々の問題は、魏晉ないし南北朝の思想を解明する上に、どうしても解決しておかねばならぬことであると思う。これについて多少考えて見たことを、いま概括的に述べて見たい。

### 幼主の服忌に関する鳳岡と白石との論争について

藤川 正数

正徳二年(一七二二)十月、六代將軍家宣薨去し、幼主実継が四歳にして位を嗣いだ。この際幼主家継に服忌が有るか無いかという事で、林信篤鳳岡と新井君美白石との間に、激しい論争の行われた事は、周知の話柄となっている。しかし、この論争に於ける礼学上の意義については、未だ論及された者が無いようなので、その点について考察して見たい。

### 論語の外題について

新見 保秀

我国古伝写本中には、論語のことを、「円珠経」と称する外題が存する。この題簽の有る最も古いものは、建武四年抄本である。その外宮内庁書陵部にも円珠五冊、京都童谷大学附属図書館にも同じく二冊存する。何れも魏何晏集解本にして、三本共に清原家の伝本である。つきには、論語のことを、「鐘鏞」又は、「喉衿」とも言っている。この出典は孟子及孟子篇叙、漢趙岐註の序文の中に、「一論語者五經之鐘鏞、六芸之喉衿也」とある。仍って、「鐘鏞

と喉衿」とは、もはや後漢の代に、その外題の存した事は知られるのである。が、しかし、「明珠経」については、中国にも見当らないから、或は、我博士家がつけた外題ではなからうか。そこで、これらの外題についての出所を究明しようと思う。

### 児女英雄伝のおもしろさ

杉森正弥

語学的乃至風俗史的史料としてだけ価値が有る清末小説と評されているこの書が、迂腐な気分、思想に貫かれながらも、何か捨て難いものを持つていて、言うのは、たとえは当時から今日へかけての、人々の気分や願いを、いろいろと反映しているからではないか。暗愚なる庶民と暗愚ならざる人々の気分を反映し、ばかばかしさとおもしろさ、卑俗と真実、保守と進歩などの片鱗をのぞかせた作品であるからこそ面白いと言う言葉を書えと思うので、それらの例を上げて述べる。

### 漢文(中国文)および漢文学(中国学)の理想的教育体制

寺岡竜含

吾が国の中学校、高等学校に於ける漢文(即ち中国文)および大学に於ける漢文学(即ち中国学)が教育組織上で占めて来ている形態は、好ましいものであるとは絶対に言えない。然らば、その好ましくないと言うのは如何なる点であるか。またその好ましくない形態を余儀なくさせられて来ているのは如何なる理由によるものであるかを考え、好ましい理想

的なものは如何に有るべきかを具体的に論究することにする。

### 民国初、中期の経学観とその資料

内野熊一郎

民国初、中期にかけて、西欧科学移入により、「経学」が如何に再検討され、見直されようとしていたか、を究明し、併せてその資料を展示したい。

### 昭和三十三年度研究発表会

#### 研究発表要旨

#### 王弼繫辭伝注の存在について

藤原高男

陸徳明がその經典釈文叙録に「永嘉之亂施氏、梁丘之易亡、孟、京、費氏之易、人無伝者、唯鄭康成、王輔嗣所注行于世、而王氏為世所重、今以王為主、其繫辭以下王不注、相承以韓康伯統之、今亦用韓本」と記述して以来、王弼易注には、繫辭・説卦・序卦雜卦諸伝の注が存在しなかつた、と言うのが定説とせられてゐる。然し、果して定説の通りであつたであらうか。韓康伯注には「王弼曰」として引用する語が、繫辭伝に三条、雜卦伝に一条存する。此の四条は何に基くものであらうか。此の疑問に対して、内野博士は「弘決外典抄の経書学的研究」に於

て、中村学士は「五行大義所引易・尚書考」に於て王弼繫辭伝の存在を推論せられた。私は奈良興福院経庫所蔵の韓周易疏論家義記中に、新たに発見した資料により、三度、此の問題について解明を試みてみた。

#### 衛人精神について

緒形暢夫

所謂純粋法家と目せられる興起・商鞅の共通問題について、その本すくところを検討したい。

#### 米沢本黄善夫刊本史記の特色について

水沢利忠

米沢に伝来せる黄善夫本史記は、現存史記諸版中随一の逸品である。その所以を版本としての資料性並びに標記に見られる特色という観点から明らかにしたい。

#### 魏晉の礼論・礼説に

#### 現われたる一傾向

加賀栄治

礼が社会を規制し秩序を維持するものとして、すぐれた中國的な伝統を持続したことは、やはり承認されるべきことであると思う。しかるに魏晉時代は、中國精神史上、礼觀念が混亂し、弛緩した時代と評され、従つてその社会は、風俗の混濁、礼教の弛廢したそれとしてとらえられている。果して然りであらうか。ここで私は、いたずらに魏晉時代の為に弁

護しようとするものではないが、この時代の礼論、礼説の問題を検討し、その問題点と、問題とする方向と、問題に対する論証をおしすすめていくいき方をこまかく考究することによって、魏晉人は礼觀念をいかにとらえたか、またいかにとらえようとしたかを明らかにし、魏晉をひとしなみに礼教の弛廢、風俗の混濁と規定する見解を再検討しようとするものである。礼制の細密化、ないしその合理化の傾向は、しばらく措き、主として礼觀念を問題とした。また錯雑した論説は、当然その論者が立っている場(社会的基盤をも含めて)からセバレートすべきであるが、それもしばらく措き、一つの試論として、中国文化意識史の一コマとしての魏晉の文化觀念を考へたい。

## 大正文学に於ける中国女性像

——森鷗外「魚玄機」について——

杉 森 正 弥

《漢文》に造詣深く、中国を見聞もしてきたこの文豪が、中国の女性像をめぐりに描きつつも、辛亥革命の直後、第一次世界大戦のさ中において、現実の中国女性に注目してはなかつたこと。

## 王世貞と袁宏道

松 下 忠

学界の通念としては、王世貞は古文辞派格調説の主張者、袁宏道は反古文辞派性靈説の主張者として真向から対立する人物と理解されているのではない

かと思う。然るに両者の主張には、類似点が極めて多い。この事は例えば、(1)性靈の語の使用、(2)詩文變遷論、(3)学問教養、(4)復古の説、(5)白蘇に対する私淑、(6)その他詩文論に於ける具体例等に於て証明することが出来る。然らば両者の間には如何なる密接な交渉が有ったかという点が問題になると思うが、その証拠は適確にかむことが困難である、而して本論考の場合に、そのような証拠の有無は必ずしも問題にしなくとも良いと思う。以上の諸項について考察し、結論として、〔I〕性靈説の先唱は王世貞であること。〔II〕更に思い切つて表現すると、袁宏道の性靈の基盤は王世貞の詩人論であることを明らかにしたい。

## 高等学校に於ける

## 漢文教育の問題点

大野 知 二

1. 学校に於ける、カリキュラム編成上の問題点
2. 漢文に対する、認識上の問題点について
3. 教科書の單元配置における問題点について
4. 漢字との関連における問題点について
5. 漢文法の取扱における問題点について
6. 学習活動における問題点について
  - (イ) 社会科的学習が望ましいのではないか
  - (ロ) 補助教材の使用について
7. 漢文を国語科の中に入れるべきかについて

## 学 会 彙 報

○昭和三十三年度漢文学会総会次第(六月三十日)

〔研究発表会〕

一、沈亜之と小説

(新潟大) 内山 知也氏

一、鄭人精神の一考察

(教育大) 緒形 暢夫氏

一、詩人としての曹丕の評価

(教育大) 鈴木 修次氏

一、魏晉玄学の実相

(北学大) 加賀 栄治氏

一、幼主の服忌に関する鳳岡と白石との

論争について (香川大) 藤川 正教氏

一、論語の外題について

(東学大) 新美 保秀氏

一、兒女英雄伝のおもしろさ

(北学大) 杉森 正弥氏

一、漢文(中国文)及び漢文学(中国学)の

理想的教育体制 (福井大) 寺岡 竜含氏

一、民国、初・中期の経学観とその資料

(教育大) 内野熊一郎氏

〔総会〕

一、報告

1. 庶務報告 鈴木委員

2. 研究報告

鎌田委員、前野委員

3. 会計報告

安居委員

○昭和三十三年度月例会

△十一月例会(十六日)